ただ　きみを　よむ

作　折田

お願い事がひとつだけあります。
あなたの持つ美しさで読んでください。

登場人物

女　ヒールを履いた女

リパ　はだしの少女
シック　車椅子に乗った青年
ヒイロ　施設の女の子
レン　施設の男の子
院長　施設の院長

くっちん　とある国の子供
れいれい　とある国の子供
いち　とある国の子供
むーさん　とある国の子供　オカマ

老人　足の腐った老女
トキ　永遠を探している女性
街の住人　女とぶつかるだけの住人
街の子供　女に林檎を売りつける子供

海の音がする。
明かりがつく。

女　「人生について考えました。1秒先のことから、５０歳になった姿、死ぬときのことまでを。私はこれから何をして、何を続けて、どう朽ちるのだろうか、そんなことを、汽車や馬車に揺られながら、歩きながら、湯舟に浸かりながら、考えました。
あの楽園を出て、もうどれくらい経ったのだろう。知り合いのいない、慣れない土地で、強がりはいえません。当たり前の土地が、慣れた環境が、とても恋しい。私は結局、あの場所を離れられない気がする。けれど同時に、どこででも生きていけることを私は知っている。今は、あの場所で生きていたかったと思うだけ。あの場所が、愛しいだけ。
人生について、考えました。」

海の音、だんだん遠くなる。
女、リパと入れ替わり退場。
シック、車椅子で登場。

シック　「(空を見上げ)リパ、見て」
リパ　「わあ」
シック　「今日は空が澄んでるね」
リパ　「(飛行船を見つけ)あ。ねえ、私いつかあれに乗ってみたいの」
シック　「飛行船？」
リパ　「そう」
シック　「いいね」
リパ　「一緒にがいい」
シック　「僕と？」
リパ　「ええ」
シック　「光栄だ」
リパ　「うふふ」

2人、しばらく空を眺める。

シック　「空を飛ぶものが鳥だけではなくなったとき、人はどう思ったんだろう。その当時を生きた人でないことが少しだけ、悔しい」
リパ　「なあにそれ」

シック　「(照れたように笑う)」
リパ　「当たり前じゃない。あなたは今、ここに生きてるんだもの」
シック　「そうだね」
リパ　「私も、いつかあの飛行船で飛んでいくわ。そしてたくさんのものを見るの」
シック　「うん。どこへだって行ける」
リパ　「……本当にそう思う？」
シック　「もちろん」
リパ　「どこへでも行ける？」
シック　「ああ」
リパ　「あなたと一緒がいい」
シック　「(困ったように笑い)光栄だな」
リパ　「あなたはどこにいきたい？　なにを見たい？」
シック　「君の見たいものが見たい」
リパ　「欲がないのね」
シック　「そうかい？」
リパ　「まあいいわ。そうね、まず海に連れてってあげる」
シック　「へえ、海」
リパ　「知らない？」
シック　「うん。リパが知ってることを聞かせて」
リパ　「途方もなく大きくて、この世のすべてを飲み込んでしまうほどの水溜まりよ」
シック　「ははは、すごいな」
リパ　「舐めるとしょっぱくて、誰もいないのにざぷんざぷんって、ずうっと水が揺れてるの。想像出来る？」
シック　「ううん」
リパ　「空みたいに真っ青で、なのに手のひらに掬うと透明なの……(と掬う)」
シック　「わあ……」

舞台、だんだん暗くなる。
2人はリパの手のひらに視線を落とす。

シック　「星だ」
リパ　「私ったら海と一緒に捕まえちゃったのね」
シック　「入れ物を用意しようか」
リパ　「いいえ。逃がしてあげるわ」
シック　「いいの？」

リパ　「さようなら。他の人に捕まっちゃダメよ」

2人、逃がした星をいつまでも見送る。
リパ、そのうちシックを見つめる。
シックはずっと空を見ている。
暗転。

明かりがつく。
リパ、数人の子供達に囲まれて、本を読んでいる。

リパ　「この世界に生きるものたちは、懸命で美しくて、命の儚さを体現しているのに、私はいつから、こんなにも醜くなってしまったのだろうか。私はなんのために生きているのだろうか。楽しいこと、働くこと、それらのために生きているのだろうか。人間は、なんのために生きているのだろう。結局動物なのだから、子孫繁栄のためだろうか。そうであるなら、なぜ神様は、他の動物のように、私たちを美しく設計してくれなかったのだろう。あまりにも醜い生物を地球に落として。私に一体何が出来るのだろうか。私はなんのために生きているのだろうか」

シック、離れたところからそれを聞いている。

シック　「みんな、レンたちがかくれんぼする人ーだって」
子供1　「やったあ、かくれんぼ」
シック　「花びらから零れた中庭にいるよ」
子供2　「リパ、ありがと」
子供3　「ぐりこがいいなあ」

子供達、退場。

リパ　「かくれんぼかあ。私も行こうかな」
シック　「何読んでたの？」
リパ　「ああ、感情詩集、ですって。己のすべてを、かき集めた作品なんですって」
シック　「難しそうな本だね」
リパ　「うん……」
シック　「どうしたの？」
リパ　「難しいわ」

シック　「(笑う)」
リパ　「あの子たちにも、私にも。少し早かったみたい」
シック　「そうかな」
リパ　「そうよ」
シック　「そんなことないさ。君は」

シック、リパを見る。

リパ　「私は？」
シック　「……どこへでも行けるんだよ」
リパ　「なあにそれ(と笑う)」
シック　「……僕も読みたいな」
リパ　「いいわ」

リパ、本をシックへ。
シック、適当にページを捲る。
リパ、隣から本を覗く。

シック　「恋ってなんて劇薬でしょう。驚くほど景色が色鮮やかになるかわりに、驚くほど辛いのです。なんの前触れもなく胸が張り裂けそうになって、たまらなく泣きそうになって、いっそ死んでしまいたいとすら思う。恐ろしいことに、この劇薬は一度飲んでしまうと、解毒剤がないのです。ただ自然に毒が抜けていくのを待つしかないのです。ああ、なんてこと。私きっとその前に死んでしまうわ」
リパ　「ふふふ」
シック　「面白いかい？」
リパ　「だって、随分大げさだから」
シック　「でも、本当に恐ろしいらしい」
リパ　「意外だわ。素敵なものだと思ってたのに」
シック　「(再び本に視線を落とし)恋ってなんて劇薬なんでしょう。恐ろしいことに、この劇薬は、ふとしたときに飲むカクテルなんかに混ぜられていて、いつ飲んだかさえ分からないのです……」
リパ　「カクテル」
シック　「お酒とお酒を混ぜた飲み物だよ」
リパ　「ふうん……」
シック　「お酒なんて飲まない方がいいけどね」

リパ　「そうなの？」
シック　「うん、飲まない方がいい」
リパ　「ふうん……」

沈黙。
リパ、そのうちシックの横顔を見つめる。
ヒイロ、楽しそうに登場。

ヒイロ　「あ、いたいた。また本読んでる」
シック　「まあね」
ヒイロ　「面白かったら私も貸してよ」
シック　「きみ、本なんて全然読まないだろ」
ヒイロ　「やだあ。時々は読むもん。ねえ、それよりちょっとこっち来てよ」
シック　「なに？」
ヒイロ　「変な虫いたんだって」
シック　「えー」

シック、楽しそうにヒイロについていく。
取り残されるリパ。

リパ　「虫ぐらいここにもいるのに」

リパ、蝶々を捕まえようとする。

リパ　「捕まって、蝶々さん、シックに、見せたら、すぐ離すから」

シック、戻ってくる。

シック　「リパ、何してるの」
リパ　「捕まってくれないの」
シック　「蝶々捕まえたいの？　危ないよ、あ」

シック、よろけたリパを抱えるように己に寄せる。

シック　「大丈夫？」
リパ　「ごめんなさい。ありがとう。シック、足平気？」

シック　「うん」
リパ　「変な虫見にいったんじゃないの？」
シック　「だってリパが来てなかったから」
リパ　「変な虫より、蝶々がいいわ」
シック　「でも急に捕まえようなんて、どうしたの」
リパ　「あなたに見せようと思ったの」
シック　「そっか。ありがとう、リパ」
リパ　「もう飛んでいっちゃったわ」
シック　「いいんだ。僕も見れたよ」
リパ　「そう……」
シック　「どうする？　変な虫、リパは興味ない？」
リパ　「せっかくだし、見るわ」
シック　「一緒に行こう」

と、リパ、シック退場。入れ替わりで女が登場。
どこかの街。
女、住人とぶつかる。

住人　「おっと失礼」
女　「こちらこそ」
住人　「みない顔だ。観光かい？」
女　「ええ、まあ」
住人　「何もない街だがね。良い旅を」

住人、退場。

女　「柵ばかりの人生だと思っていたけど、ある日唐突に気がついたの。違ったみたい、ああ、柵をつくるのが好きなだけだったんだって。悩むことが、苦しむことが。自分を傷つけている状態に、満足していただけなんだって。自覚したとき、少しだけ、自分に優しくしようと思えたけど、それでも私は、柵をつくるのが好きらしい。だから、ときどきだけ、柵を外す。今は自分を大切にする時間にしようって。海のことを考える。広大で、すべてを飲み込んでしまういのちの出発地点のことを。宇宙のことを考える。おそらく最も永遠を飾るにふさわしい、すべての起源のことを。見て、地球がある。私なんて、点にすらならないほどのちっぽけな存在で、私がいまこうして生きていることなんて、宇宙の動きには全く干渉しないのだ。ああ、今日も生きよう。好きに生きよう。

そして眠るわ。わたしのまぶたの裏には、いつだって地球がある」
街の子供「(林檎を差し出して)ん」
女「(子供を見る)」
街の子供「ん(林檎を差し出す)」
女「いいわ(と受け取り、コインを渡す)」
街の子供「あんた、観光？」
女「そんなところ。探しものをしにきたの」
街の子供「手伝えるよ」
女「海を探しているの」
街の子供「海。海か、やっぱごめん、無理かも」
女「この国にあるのよね」
街の子供「それは、あると思う。実際に見たことはないけど。遠いんだって」
女「そうなの」
街の子供「すごく遠いって」
女「焦らず行くわ。ありがとう」
街の子供「あんたが海に行けたら、俺もいけるかな」
女「海に？」
街の子供「ううん。この世界のどっかにある、子供たちばっかの国。大人に虐げられることはなくて、自由で、幸せなんだって」
女「その国に比べたら、海のほうがよっぽど近いわ」
街の子供「オレからしたらどっちも同じくらい遠い場所さ」
女「そう。あなたが、あなたの望む場所に辿り着けますように」
街の子供「どうも。せめて果実分の幸運を」

街の子供、退場。
女、林檎を鞄に仕舞いながら退場。
入れ替わるようにリパ登場。
リパ、空を眺めている。
そこにヒイロとリパが喋りながら登場。

ヒイロ「院長はなんにもわかってない」
シック「全部わかってくれる人なんていないよ」
ヒイロ「でもシックはわかってくれてる」
シック「そんなことないよ。そう見えるだけだ」
ヒイロ「それでも十分嬉しいもん」

リパ、どこかへ行こうとする。

シック　「リパ」

リパ、立ち止まる。

・

シック　「海に住む生き物の絵が描いた本を見つけたんだ。魚ってわかるかい？　たくさんの種類がいてね、同じ魚っていう仲間なのに、大きさも形も全然違うんだよ」

リパ　「変よ。海ってしょっぱいのに、生き物なんか住めないわ」

シック　「そうでもないみたいなんだ。魚以外にもたくさんの生き物が住んでるって」

リパ　「ふふふ、その本を書いた人はユニコーンね」

ヒイロ　「ユニコーン？」

シック　「ユニーク、かな？」

リパ　「ふふふ」

シック　「ふふふ」

リパ　「読んでみるわ」

シック　「うん(と本を渡す)」

ヒイロ　「よくわかったね」

シック　「ああ、まあね」

リパ、本を読みながらどこかへ行こうとする。

シック　「こら、危ないよ」

リパ　「分かってる」

シック　「分かってないでしょ(と追いかける)」

ヒイロ　「あ、私押してあげる」

シック　「ありがと」

ヒイロ　「んふふ。貸し１００個目」

シック　「ええ～、多くない？」

リパ　「ついてこないで。一人で読みたいわ」

シック　「(からかうように)僕がいなくていいの？」

リパ　「いい」

シック　「(ヒイロと顔を見合わせてから)僕たち、死んだ星の部屋にいるね」

リパ　「うん」

ヒイロ　「喧嘩したの？」

シック　「覚えはないんだけどなあ」
ヒイロ　「シックが怒らせたんじゃないのお」
シック　「あとで聞いてみるよ」
ヒイロ　「そうだ、つぼみに水あげないと」
シック　「ああ、部屋の？」
ヒイロ　「そうそう。もうすぐ咲きそうだよね」
シック　「最近見てなかったなあ。水汲んでいこうか」

と、シック、ヒイロ、退場。

リパ　「(苦しそうに)待って……」

リパ、その場に座りこむ。
身もだえる。
リパ、苦しさに涙を流す。
舞台、だんだん暗くなる。
無数の手のひとつがリパにパンプスを差し出す。
リパ、手を伸ばす。
暗転。

明かりがつく。
はだしの老婆が道端に座っている。
女、うずくまっている。
脱げたヒールを拾い、履こうとする。

老婆　「苦しそうだねえ」
女　「え？　いえ……」
老婆　「見ない顔だねえ」
女　「ええ、まあ、観光で」
老婆　「こんな何もない土地にねえ」
女　「そんなことないわ。ここには海がある」
老婆　「ははは、海かい。そうだねえ。しかし、海は難しいねえ」
女　「難しいんですか？」
老婆　「少なくとも私の腐った足じゃあ、もういけないねえ」

女、老婆の足を見る。

女　「そんな、腐ってるだなんて」
老婆　「もうだめだねえ。見てもわからないだろうがさ。しかし腐ってしまったが、あんたさんよりかは苦しくないよ」
女　「私、別に……」

女、ヒールを持ったまま黙り込む。

女　「私、苦しいのかしら」
老婆　「そんなこと自分に聞いてみるんだねえ」
女　「時々、水中でもないのに息が苦しくなるの」
老婆　「苦しそうだねえ」
女　「生きていることが、苦しくなるの。どうしようもなくなるの。私、生きていることに疑問を持たなくなるのが怖いわ。でも、その時がきたとき、怖さすら感じなくなるのなら、怖がる必要なんてないのかしら。その時がきたら、息苦しくなくなるのかしら。その時がきたら、幸せ、なのかしら……」
老婆　「そんなもの、いくら考えてもわからないだろうねえ」
女　「おばあさん。おばあさんはいま、苦しくないですか。怖くはないですか」
老婆　「さあ、考えたこともないねえ。そんな時代もあったかもしれんが」

沈黙。
遠くで子供たちのはしゃぐ声がする。

女　「人間って、どうして他の生き物のように美しくなれなかったのかしら。どうして神様は思考や知識を与えたのかしら。どうして、ただ懸命に、生を全うさせてくれなかったのかしら」
老婆　「さあねえ。しかしまあ、確かに、私たちはいきすぎたのかもしれないねえ。生きるために食べる。食べるなら美味しいほうが良い。料理をする。美味しくなった。それでよかったはずなのにねえ。いつからだろうねえ、食事という生きるための行為が、娯楽になってしまったのは。感謝という当たり前のことも忘れてねえ。ああ、私たちはいきすぎたねえ」
女　「私たち人間は動物として、いってはいけないところまで、いきすぎたのね……」
老婆　「苦しそうだねえ」
女　「人であることが」
老婆　「苦しいのかい」

女　「……わからないわ。私は何になりたかったのかしら」
老婆　「随分贅沢な悩みだねえ」
女　「贅沢……贅沢なのかしら」
女　「あんたさんは、まだそれを脱ぐにははやいってことだねえ」

老婆、ヒールを示す。

老婆　「あんたさんの足は、まだ海に行けるんだねえ」

女、自分の足を撫でる。

塔婆　「苦しそうだねえ。あんたさんは、生きてるんだねえ」
女　「私、海に行くわ。どれだけ入り組んだ道でも、足がもげても、醜くあがこうとも、きっと、海にたどり着いてみせるわ」
老婆　「ああ。あんたさんなら、辿りつけるだろうねえ」
女　「これ、よかったら。幸運を」

女、鞄から林檎を取り出し老婆に渡す。
ヒールを履いて、立ち上がり歩き出す。
入れ替わるようにパンプスを履いたリパが登場。
リパ、空を見ている。
腰かけて、本を読み始める。
そこにシック登場。

シック　「何読んでるの？」
リパ　「うさぎの城。最近新しく入った本よ」
シック　「そうなんだ。どう、面白い？」
リパ　「うん。うさぎの国の話なんだけど、主人公のうさぎがね、自分の城をつくるために仲間と協力するの」
シック　「自分のお城かあ。仲間はどれくらいいるの？」
リパ　「難しいわ」
シック　「難しい？」
リパ　「だって、減ったり、増えたりするんだもの。主人公のうさぎがね、殺してしまうの」
シック　「どうして？」
リパ　「自分と意見が合わないからですって……。それってなんだか、とても、悲し

いわ……」
シック　「そうだね……」

2人、沈黙。
リパ、履いているパンプスを撫でる。

リパ　「足、痛い？」
シック　「え？」
リパ　「痛みはないの？」
シック　「ああ、痛みはないよ。動かないだけ」
リパ　「昨日、シックが立って歩いている夢を見たの」
シック　「夢の中の僕はどんなだった？　嬉しそうだった？」
リパ　「ううん。全然歩こうとしないの。私、あなたを引っ張って、海に行こうとしたの。でもあなたは数歩だけ歩いてから、動かなくなって。とても悲しそうな顔をしていたわ。夢のなかなのに、なんでも好きにできるはずなのに、あなたは自分の足の正しさを厭に理解して、こうあるべきじゃないんだって、歩くことをやめてしまうの。海は、すぐそこにあるのに……」
シック　「……」
リパ　「大丈夫よ、シック。海には私が押して行ってあげる。足なんか動かなくても、大丈夫なのよ」
シック　「きみは、強いね」
リパ　「そうかしら」
シック　「ああ。本当に……(静かに泣く)」
リパ　「どうしたのシック、ねえ泣かないで……」
シック　「ごめん、何でもないんだ、大丈夫だよ」

レン、登場。

レン　「あれ、シックどうしたの？」
リパ　「何でもないのよ」
レン　「リパが泣かせたの？」
リパ　「うん……」
レン　「みんなあ、リパがシック泣かせたあ」
シック　「やめてよ、もう、ちがうんだ」
レン　「平気なの？」
シック　「もちろん」

リパ「良かった」
レン「ふうん。死んだ星の部屋の花が咲いたって、ヒイロたちが騒いでるんだ」
シック「咲いたんだ。リパ、見に行こうよ」
リパ「ううん」
シック「いいの？」
レン「後でにしたら？　今すっごいぎゅうぎゅうだし」
シック「そうだね。リパ、後で見に行こうよ」
リパ「うん」
レン「リパの本、最近新しく入った本？」
リパ「そうよ」
レン「読もうと思ってたらリパが持ってたんだ。読み終わったら貸してよ。予約」
リパ「分かった。でも、悲しい話よ」
レン「いいよ、悲しいかどうかはオレが決めるから。でもさ、本って、どこから来るんだろうな」
シック「いつも気づいたら増えてるよね」
リパ「私達が眠っている間にね」
レン「オレ見たことあるんだ。門が開いて、荷物が馬に引っ張られてくるところ。あの馬は、どこから来るんだろう」
リパ「そんなの、外からに決まってるじゃない」
レン「じゃあ外って何だよ」
リパ「外っていうのはね、海があるのよ」
レン「本は？」
リパ「本もあるわね」
シック「外には闇と光の間の部屋よりもたくさんの本があって、きっと、外の人間が全員読んでしまった本をここに運んでるんだよ」
レン「さすがシック。詳しいんだ」
シック「そんなことないよ。僕も何にも知らない」
レン「でも院長からいろいろ聞けるんじゃないの？」
シック「ううん、お母さん何も教えてくれないから、みんなと一緒」
レン「ふうん」
リパ「院長に教えてもらわなくても、私とシックは、自分の目で見るからいいの」
レン「外行くの？　いつ？」
リパ「いつか」
レン「ふうん。外、行きたいの？」
リパ「もちろん」
レン「そっか。変なの。でも、いけるといいな」

リパ　「行くわよ。ね、シック」
シック　「そうだね、リパ」
レン　「オレも本読もっと」

レン、退場。

リパ　「シック、平気？」
シック　「何が？」
リパ　「私、聞くことしかできないけど、でも、一生懸命に聞くわよ」
シック　「ありがとう。でも、なんでもないんだよ」
リパ　「本当に？」
シック　「うん」
リパ　「それならいいの」

リパ、読書の続きを始める。

リパ　「かえるのララは、それではお城が崩れてしまうと言いました。それを聞いたうさぎのミイが、怒り出します。私のお城だ、私のお城の部屋にケチをつけるなんて許さない。そう言って、薪を切るための斧を持ち、かえるのララに向かって振り落としました」

くっちん、れいれい、いち、むーさん、登場。
いち、リパの隣に腰をおろし、本を覗く。

れいれい　「私の城に意見するものなんて必要ないのだあ！」
シック　「ああ、なんてひどい。さようなら、ミイ。きみが自分の不幸にいつか気が付けますように」

くっちんがシックの車いすを押し、退場させる。

リパ　「ああ、ララ。ミイ、なんてことをするの。ララは私の大切な弟なのに。さようなら、ミイ、あなたが自分の不幸に気付かぬまま死にますように」

リパ、退場。

いち　「かえるのルルは、ララの亡骸を抱いて、故郷の川へと静かに帰っていきまし

た。ひとりぼっちになったミイは、再び仲間を探します。自分に意見せず、ただ忠実に、言うことを聞いてくれる仲間を」

むーさん「ねえ、この話暗すぎるわよお」

れいれい「そうだね。やめよう」

くっちん「やりたいって言いだしたのれいれいだろ」

れいれい「だってかわいいタイトルだったんだもん」

いち「やっぱエンジェルごっこが一番楽しいって」

くっちん「俺らずっとエンジェルごっこしてんじゃん。そろそろ違うレパートリーも取り入れていきたいってのが今回の会議結果だろ」

れいれい「この世界の平和は私達が守る！　倒されなさいワルイーノ！」

くっちん「はっはっは。このワルイーノ様に向かっていい度胸だ格下エンジェル！」

れいれい「靴下とはどういうことだ！」

くっちん「格下な。とりあえずもっかいなんか本探そうぜ」

いち「そうだね。あ、でもせっかくならこの本最後まで読むよ」

むーさん「ミイに救済はあるのかしらねえ」

くっちん「ないに一票」

れいれい「えー、かわいそうだよ。あるに１００票！」

むーさん「何人分よそれ」

いち「私もないに一票」

むーさん「じゃあ私はあるに一票よ」

4人、退場。
女とトキが登場。

トキ「そう、海を見に。いいわね。案内できなくて残念だわ」

女「いいの。一人でも見つけてみせるわ」

トキ「あなたが海を見つけられることを願ってるわ。あなたも、私が永遠を見つけられるよう、願っておいて」

女「そうね。でも、永遠って海を見るよりうんと難しいことだと思うわ」

トキ「でもどこかにはあるはずなの」

女「宇宙ですら、永遠ではないというのに？」

トキ「(笑う)もちろん。探しているのは、私という有限にとっての永遠よ」

女「あなたにとっての、永遠？」

トキ「そう。私が死ぬまでの、永遠を探しているのよ。この街は違ったみたい。とても、良い街だったんだけど」

女「あなたにとってのって、それは永遠と呼べるの？」

トキ「当然じゃない。だって、私は私が死んだあとのことなんて知りえないのだから。生きているときに目にするものがすべて。人類にとっての永遠が難しいのはわかるわ。私が探しているのは、私にとっての永遠よ。これも、なかなか難しいものね」

女「なぜ永遠を探すの？」

トキ「あら、あなただって、探しているはずなのよ。意識していないだけだわ。人は産声を上げてからずっと、永遠を探しながら生きているの」

女「私は、永遠を探しながら、生きている……」

トキ「２２の頃に、祖父が死んだ。私という世界の外側に、永遠がないことを知った。ならばせめて、星をつくれるような人でありたかったと、私泣いたの」

女「星？」

トキ「この世界に存在するもののなかで、きっと最も永遠に近いから」

女「そうかもしれないわね」

トキ「本当はね、星として生まれたかったの」

女「星に生まれて、どうしたかったの？」

トキ「どうもしないわ。地球の外側になら、永遠という答えがすぐそこにあったかもしれないと思っただけ。人間が無理やり針に閉じ込めた時間というものにも縛られず、永遠を感じられたのかしら……」

女「どこにいても、時間はあるわ。命は老い、いずれ朽ちるもの」

トキ「そうね、でも、そうじゃないの。時間というのは、本当は、存在しないに等しいの。時間が進むなんていうけれど、進んでいるのは針だし、惑星は規則正しく動いてるだけだし、動いて、寿命がきて、いつか朽ちるだけだし。私達そのものが、生きているだけ。世界が進んでいるだけ。時は動かない。時なんて、実は存在していない。あなたが生まれた瞬間から今に至るまで、時間というものは進んでいない。あなたが動いたの。この世界では、時間がすすんだという言葉で閉じ込めているだけなのよ。人間が生きやすいようにね」

女「少し、難しいわ」

トキ「ごめんなさい。私の持論、聞いてくれてありがとう。じゃ、そろそろ駅に向かうわ。ふふふ、なんだかんだといっても、人間である限り、時間という言葉と生きていくものよね。この言葉だけは、それこそ永遠に私の世界にあるものなんだわ」

女「私も、海を見つけたあとに、探してみようかしら。永遠」

トキ「お互い、見つかるといいわね。さようなら。あなたの人生のひとかけらをありがとう」

トキ、退場。
女、トキの背中を見送る。
れいれい「お姉さん、海探してるの？」
女「え？　ええ」
れいれい「聞こえちゃったんだ。(舞台袖に)ねえー、みんなー、このお姉さん海に行きたいんだってえ」
いち「海？　誰？」
むーさん「いいじゃない、海。誰？」
くっちん「なかなか遠いけどなあ。誰？」
れいれい「知らない人」
女「はじめまして。この街には、海を見に来たの。でも大丈夫よ、自分で探すから」
くっちん「海の場所知ってんの？」
女「いえ……」
くっちん「自力は難しいよ。ここからだと4日はかかるかな」
れいれい「ねえ、海行こうよ。私も海行きたい」
むーさん「最後に行ったのいつかしら」
いち「かなり前だよね。途中まで汽車に乗って、そこからすっごく歩いた」
くっちん「あのときもれいれいが海見たいって言ったんだっけか」
いち「いや、あのときはくっちんだよ」
くっちん「俺か！」
むーさん「汽車のお金出してくれるなら、海まで一緒に行ってもいいわよ。私達、ちょうど退屈してたの」
いち「なかなかエンジェルごっこに代わる遊びも思いつかないし」
くっちん「案内料サービスするぜ」
れいれい「うーみ！　うーみ！」
女「……そうね、それじゃ、お願いしようかしら」
れいれい「やったあ！」
むーさん「決まりね。さっそく準備しなきゃ」
女「準備？」
いち「長旅になるからね、そりゃ」
くっちん「腹ごしらえ」
女「そうね。それは、すっごく大事な準備」
くっちん「久々に肉が食える」
子供達、肉肉と歌いながら、女を囲みつつ退場。

入れ替わるように、リパ、登場。
施設の門を見つめている。

院長　「外に出たいの？」
リパ　「……」
院長　「いつでも出ていいのよ」
リパ　「うん……」
院長　「でも、出ないほうが、幸せだわ」
リパ　「ここがいちばん幸せ」
院長　「そう。世界中の幸せのすべてが、ここに集まってくるの。あなたもその幸せのひとつ。あなたがいるから、シックは幸せ」
リパ　「私も、シックがいるから幸せ」
院長　「素敵な関係が築けているのね。外の世界で、あの子の足は動かなくなったの」
リパ　「何があったの？」
院長　「シックの父親は、かなりの暴れん坊でね。それが、お酒っていうものを飲むとすごくひどくなるの。あの子の足は、父親に潰されてしまったのよ」
リパ　「お酒って、こわいのね」
院長　「そうよ。外の世界には、お酒のように恐ろしいものがそこらじゅうに転がっているの。だから人々は本を作ったの。理想の世界を描いて、それを読むことで、夢想することで心の平穏を求めたのよ」
リパ　「でも、こわい話もたくさんあるわ」
院長　「その話を読むことでも安心するのよ。ああ、自分たちはまだマシだ、こんな惨劇に比べたら……ってね」
リパ　「そう……」
院長　「あなたが外に出たかったら、いつでも出ていいの。でも、あなたの幸せを願う身としては、最後まで止めるわ。リパ、どうか、シックのそばにいてあげてね」
リパ　「ええ。シックのこと、大好きだもの」
院長　「ありがとう」

院長、退場。
シック登場。

シック　「きみはいつだって、この門を押せるんだよ」
リパ　「いいえ、門を押すのはあなたよ。私が押すのは、あなただもの」

シック　「僕はきみの見たいものが見たい。飛行船も、海も、魚も。外にはさ、ここにあるような幸せは、確かにない。その代わり、ここにはないすべてがある」
リパ　「……幸せって、手放すのが、恐ろしいのね。不思議だわ。幸せなはずなのに怖いなんて」
ヒイロ　「シックー、みんなで伝言ゲームしようってー」
シック　「あとでいくよー」
リパ　「シック、一緒に行こう。私一人じゃ無理よ」
シック　「リパ。僕の足じゃ、きみと歩けない」
リパ　「押すわ。あなたの背中、ずっと押すから」
シック　「僕はきみに何もしてあげられない」
リパ　「傍にいるだけでいいの」
シック　「ダメなんだよリパ。それじゃダメなんだ」
リパ　「ダメじゃないわ。私、あなたと一緒がいいの。飛行船に乗るのも、海を見るのも。あなたがいないと無理よ」
シック　「きみはどこへだっていける。僕がいなくても、どこででも生きていけるんだ」
リパ　「無理よ。だって私まだ」
シック　「きみはもう、気付いているはずだ」
リパ　「いや……何も知らない。私まだ、まだ、子供なの……」
シック　「リパ。もう気付かないふりはできないんだよ。リパ、きみは、一人で、何だって出来るんだよ」
リパ　「できない。できないわ。だからそばにいてよ。ううう、ううう」

無数の手のひとつがリパにヒールを差し出す。
リパ、拒否する。
シックがヒールを差し出す。

シック　「リパ、きみは、どこへでも行ける」
リパ　「あなたと一緒がいいの」
シック　「リパ、僕はここにいる。ここで、きみの北極星になるよ。さあ、リパ。大丈夫。幸せはきみのなかにちゃんとあるんだ。これから先、きみはたくさんの人に出会って、時には立ち止まって、迷子になるかもしれない。そんな時はどうか僕を思い出して。きみの標になるよ」
リパ　「好きなの。あなたに、いてほしいの……」
シック　「(僕もと言おうとして思い留まる)飛行船に乗って。海を見て。リパ、外の世界は、一生かかっても周れないほど、大きく美しいんだって。リパ、きみの

目で見てきてほしい」

リパ、靴を受け取る。
舞台、暗闇に包まれる。

院長　「シック、みんながまだかまだかって待ってたわよ。あら、リパは？」
シック　「海を見に」
院長　「外に出たの？　……まあ、あんな醜い場所に……。かわいそうなリパ、きっとすぐに戻ってくるわ」
シック　「どうだろうね」
院長　「心配ないわ、自分のことを少女だと思っている非力な子よ。それにあなたを愛してる。さシック、もうすぐご飯が出来るから戻ってきてちょうだいね」
シック　「うん。……さようなら、リパ」

ぼんやりと明かりがつく。

女　「本当に遠いのね」
いち　「まだまだ歩くよ」
れいれい　「汽車が恋しいよお」
むーさん　「踏ん張りなさい」
くっちん　「お姉さん、野宿全然慣れてないのな」
女　「そうね。道で眠るなんて、はじめてよ」
くっちん　「ほとんど寝てなかったじゃん」
女　「眠れたわよ。少しだけだけど」
れいれい　「お姉さん、それじゃ歩きにくいんじゃない？」
いち　「そうね。脱いじゃったほうがいいかも」
女　「大丈夫よ。まだまだ歩ける」
くっちん　「無理はやめろよ。倒れられたら、こっちも困るし」
いち　「なあんであんたはそういう言い方しか出来ないのかなあ」
むーさん　「ごめんなさいね、口は悪いけど、心は坊やなの」
くっちん　「そこは口は悪いけど根は優しいとか言うところだろ」
むーさん　「あら言われたかったの？」
くっちん　「キモイ」
むーさん　「ひどい」
れいれい　「うちの馬鹿がすみません」
女　「こっちこそ、気にさせてしまってごめんなさい」

いち　「むーさん、これが大人の女ってやつだよ」
れいれい　「見習いなよ」
むーさん　「やだ、全然聞いてなかったわ」
いち　「そういうとこだぞオカマ」
れいれい　「まったくオカマなんだから」
むーさん　「あんたたち雑ね。いいけど」
女　「(笑う)」
ヒイロ　「レン」
レン　「おう、シック」
シック　「すぐ行く。リパ」
女　「……」
むーさん　「せっかくなら、エンジェルごっこしながら行かない？」
れいれい　「わあ、いいね。美少女天使二号、れいれい」
いち　「一号、いち」
むーさん　「三号、むーさん」
くっちん　「一号から名乗ってくれよ」
いち　「うるさいわねワルイーノ」
くっちん　「俺疲れるからパス。お姉さん、ワルイーノする？」
女　「ワルイーノってなに？」
れいれい　「悪者だよ。私達エンジェルズに倒されるの」
女　「そうなの。倒されるのは、少し嫌ね」
くっちん　「だろ。ま、俺はもうワルイーノばっかしてきたから、何も感じねえけどな」
女　「ずっとエンジェルごっこしてるの？」
いち　「そうだよ。天使時代からずっとね」
女　「天使時代？」
むーさん　「そうよ。私達、天使だったの」
れいれい　「天使の頃からエンジェルごっこしてきたんだよ。でも全然飽きないんだ」
くっちん　「飽きたよ」
いち　「飽きたよ」
むーさん　「飽きたわねえ。だから新しい遊び探してるんじゃない」
れいれい　「え、そうだったの？」
いち　「でもなんだかんだ、エンジェルごっこに戻っちゃうよねえ」
くっちん　「だってそりゃもうどんだけやってんだって話だよ」
女　「そっか、あなたたちは、天使だったのね」
れいれい　「そうだよ。お姉さんももしかしたら、天使だったかもしれないよ」
女　「ふふふ、そうだといいな。……そうかも、しれないなあ」

いち　「お姉さん、平気？　ちょっと休もうか？」
くっちん　「え、でももう……」
むーさん　「しー」
女　「そうね、少し、休ませてもらおうかしら」
れいれい　「わあ、潮の匂いだねえ。お姉さん、海近いよ」
女　「ほんとう？」
むーさん　「あら、もう、れいれいったら。サプライズにしたかったのに」
女　「すぐそこに海があるの？」
くっちん　「この道を抜けたらすぐだよ。もうすぐ陽も昇る時間じゃねえかな」
いち　「そうね。日の出だわ」

舞台、明るくなってくる。
れいれい、駆け足で舞台に登場。

れいれい　「海だー。着いたー」
くっちん　「ちょっと肌寒いな」
むーさん　「でも、すごく気持ちいいわね」
いち　「お姉さん、海だよ」
れいれい　「海だ、海だあ」

4人、はしゃいでいる。
女、舞台に登場。

女　「これが海……」

女、ヒールを脱ぎ捨て、海に駆けていく。
子供達は女を気にすることなくはしゃいでいる。

女　「海だ。海だよ。私、海に来たんだよ。ああ、海だ。これが海なんだ。あなたが想像できないと笑った、途方もなく大きく、この世のすべてをも飲み込んでしまうほどの水、生命。あなたが見てみたいと言ってくれた、これが海だよ」

了